

役が二石八斗、堰下郷村の肝煎代表である当時中里村肝煎の遠藤幸助と堰元代表である上米塚村の肝煎小池喜八郎がそれぞれ二石五斗ずつ支給されていた。このことで、以上の三名が管理運営の中心になっていたことが想像できる。

なお、各村々にある大小の枝堰などの維持管理については、原則として各村々の肝煎を中心に、地首、老百姓などが協力して運営に当たっていた。

さて、「北会津村誌」によると、橋爪組や中荒井組などの地域の土壤は、大川と宮川などの複合扇状地の中州に属するため砂礫層であり、その層が下部に部厚く横たわり、薄皮まんじゅうのように表土を覆っている、とのことである。しかも、その表土の土性は砂壤土が多く、洪水の

たびごとに流され、堰堤の流失は想像以上に大きかった、と述べている。したがって「北会津村誌」にも、思い堀などの災害は洪水によるものが多い、と述べているように、その維持管理には非常に困難なものがあった、と推測される。

次の文書は明和六年（一七六九）四月に実施した岩崎堰普請のための岩崎堰人足御差紙である。

明和六年五月  
岩崎堰人足御差紙

一 五百人

岩崎前思堀  
普請人足高

一 五百人

岩崎前思堀  
普請人足高

内

印白屋敷人

中荒井組

式百四拾九人

中荒井組

百中屋敷人

橋爪組

百五拾七人

橋爪組

二拾五人

坂下組

参拾七人

坂下組

六拾五人

牛沢組

六拾参人

牛沢組

右者大沼郡岩崎前堰

右者大沼郡岩崎前堰

普請前々の通り四ヶ組の内

普請前々の通り四ヶ組の内